



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500 年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第16回】

伊達政宗と仙道・人取橋で合戦

1 国道4号沿いの供養塔

JR郡山駅から福島行の東北本線に乗る。進行右手奥に阿武隈川が流れる。左手側に国道4号が走る。郡山駅から三つ目の本宮駅で下車。そこからタクシーで本宮市青田へ向かう。目的地近くでタクシーを降り、国道4号の歩道を郡山方面に歩く。右手奥にうっすらと雪化粧の安達太良山がみえる。阿武隈川支流の「瀬戸川」をはさんで国道右側に緩やかな段々状の水田が広がる。

人取橋古戦場を示す供養塔は、国道から少し入った水田の中にある。筆者は10年ほど前にこの地を訪れた。その時と同じ景色である。本宮市教育委員会が建立した「史跡・仙道人取橋古戦場」の標柱が目に入る。四角に仕切られた土塁の中心に石碑がある。手前には香炉も置かれている。石碑の脇に塔婆とみられる木柱も立っている。ここには戦国武士の魂が眠っている。そんな気配を感じる場所だ。

「功土壇」と書かれた説明板は、本宮市教育委員会が平成23年3月に設置した。そこに「この付近一帯は人取橋合戦の古戦場で、天正13年(1585)11月17日、伊達の将、茂庭五月(73)が、(一部略)、味方の後陣となって奮戦し、乱戦のなかで討ち死にした」とある。「茂庭五月の石碑は文政11年(1828)子孫が建立した。この時、伊達側の戦死者も合葬した」とある。

2 義重、南奥から仙道へ進出

「人取橋」は瀬戸川に架かる橋である。当時は国道4号寄りの現在地より少し上流側にあった。佐竹氏は16代義舜以来、北進策をとってきた。17代義篤、18代義昭、19代義重は、久慈川沿いの城を次々と攻略し、福島県棚倉町以南を指す「南奥」を勢力圏下に治めた。「白河結城氏が本拠白河城に次ぐところとして重視してきた」(『山

祭町史第1巻通史・民族編』) 赤館城(棚倉町)も攻略した。

義重は次の目標を仙道(福島県中通り地方)の白河城に定めた。脅威を察した白川氏は周辺の国人領主に支援を求め、防御を固めた。そうした時に白川氏に内乱が起きた。叔父の義親が幼い白河城主の留守を狙って白川本家に乗っ取った。義重はこの機を逃さなかった。すかさず兵を進め、義親を生け捕り、白河城を占拠した。

義重は天正6年(1578)、二男の喝食丸(後の義広)を白川氏の養嗣子とすることで義親と和睦した。以降、白川氏は佐竹氏の勢力下に組み込まれた。これをみて周辺の国人領主と合従連衡を繰り返して来た戦国大名輩名氏に変化が現れた。『会津若松史第1巻』は輩名氏が「外交姿勢を変えて佐竹・白川と同盟を結ぶに至った」と記す。佐竹氏は南奥から仙道の拠点一つ、白河へと進出し、仙道の国人領主達が警戒感を抱き始めた。

3 伊達政宗の仙道南進策

天正7年(1579)冬、大河ドラマで有名となった三春の「愛姫」が歴史に登場する。佐竹氏の仙道進出を脅威と感じた戦国大名に田村清顕は伊達氏と手を結んだ。清顕の息女愛姫は「雪の小坂峠(福島県国見町)と二井宿峠(宮城県七ヶ宿町)を越えて三春から米沢に輿入れをした。米沢城主伊達輝宗の嫡子政宗との結婚がここに成立」(『三春町史第1巻』)したのである。

『三春町史』は「この婚姻の成立によって伊達・田村に対する佐竹・輩名・白川・二階堂・石川・磐城の連合勢力との対抗関係は決定したといえる」とする。天正八年(1580)、輩名氏最盛期を築いた盛氏が没した。後継当主には二階堂氏から「服属の証人(人質)」(『会津若松史』)として盛氏に育てられた盛隆が就いた。佐竹義重の影響力は、伊達・田村に対する「連合軍」の中でますます強

まってきた。

天正12年（1584）、父輝宗から家督を継いだ政宗が動きだした。政宗は支配地域の拡大を狙って仙道口（信夫郡以南の街道）から南進してきた。信夫郡は福島市を含む周辺地域のこと。政宗は次々に敵対勢力の城を落とし、二本松城の畠山義継に攻めかかった。事件は畠山氏とこの戦の和睦の席で起きた。「義継は隸属斡旋の礼として輝宗の宮森城に参向した。対面が終って輝宗が玄関まで送りだしたとき、義継はこれ（輝宗＝筆者）を捕らえた」（『福島県史第1巻』）。

4 南奥諸大名連合軍の結成

輝宗を連れて阿武隈川河原まできた畠山義継は、「高田原」（二本松市沖）で伊達勢に討ち取られた。同時に輝宗も亡くなった。政宗は父の恨みを果たすため田村清顕らと共に二本松城を攻撃。二本松城包囲の情報は佐竹義重にも知らされたようだ。『佐竹家譜』天正13年（1585）11月条に「芦名氏の族及び宿老等、曾て伊達政宗犯奪ふ所の仙道中を恢復せんと欲し」援軍を求めてきたとある。

『佐竹家譜』は「告げて援兵を請う」相手として義重の他に「岩城常隆、石川昭光、白川義親」の名前も書いている。政宗の南進を許せば仙道どころか南奥も危うくなる。義重は「小野崎義政を将として是を授けしむ」（『同家譜』）判断をした。義政（昌とも）は18代義篤の末っ子で小野崎氏の養嗣子となった人物。この義政が佐竹軍の総大将を務めた。葦名氏当主は急逝した盛隆の後を継いだ幼子の亀若（王とも）丸。「芦名氏の諸将其兵を含て今月10日、須賀川を発し、安積郡を略し、14日中村（郡山市）の城を攻て是を抜く」（『同家譜』）勢いで進撃した。

南奥諸大名連合軍の北進を知った伊達政宗は、二本松城の押さえの兵を残し、本宮へ集結。『仙台藩史料大成伊達治家記録1（貞山公治記録巻之1）』は天正13年11月10日条で「佐竹義重・葦名亀王丸名代某（以下略）人数三萬許リヲ率ヒテ須賀川ニ出馬」。対し「公聞召シ岩国城へ出馬。御人数馳集ル者七八千アリ」と記す。ただ、文中の「義重」はこの戦いに出陣していないので伊達側の錯誤であろう。

5 人取橋合戦をめぐる謎

『伊達治家記録1（同）』は同年11月17日条に「御本陣ヲ観音堂山ニ備ラル。（一部略）御人数都合四千許リ」。「然ルニ敵五千余騎ヲ三手ニ分ケ」、攻めてきた。本陣にいた鬼庭周防良直（茂庭五月）は乱戦の中で「殿後」を務め、討ち死にした。その様を「人取橋ノ邊ニ於テ或ハ追立或ハ追返サレテ苦戦スル事数度、敵終ニ進ム事得スシテ引退ク」（伊達治家記録1同）。

一見すると、翌日にも南奥諸大名連合軍が総攻撃をかければ、伊達軍は壊滅状態になりかねない情勢と映る。しかし、事態は急変した。『政宗記』（「本宮町史第4巻資料編」収録）は、「明くる18日、本宮へ打出けれども敵の動きを（お）そきに依て、不審に思っていたところ「付たる物見走歸りて、佐竹・会津・岩城の野陣退散なりと申す」という。一夜にして佐竹軍以下の連合軍が戦場を去った。

『佐竹家譜』は11月17日条で「夜に入て小野崎義政其奴婢の為弑せらる。此れに於て義政に相従ふ所の兵常州に歸る。会津の諸将合戦利あらざることを悟て、軍を潜めて会津に歸る」とある。義政の急死で連合軍は「合戦に利なし」と判断したのか。謎である。前年の沼尻合戦で義重は北関東の盟主だった。3万人もの連合軍を組織した人取橋合戦に義重はなぜ出陣しなかった。そこも謎といえは謎である。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



茂庭氏を含む戦死した伊達氏家臣の供養塔が建つ人取橋古戦場跡＝福島県本宮市青田